

# 花の歌歳時記

前田康子

今年も枇杷の実がみのり、鳥たちがやって来ている。ほんのりとした、人の心を落ち着かせようような色。味もまた、控えめなやさしい味。

夜が来ると、一曲だけおぼえている白秋の「ゆりかごのうた」を子供にうたう。「ゆりかごのうえにびわのかがゆれるよ。ねんねこ、ねんねこ、ねんねこよ」歌が始まると、子供は嬉しそうな目をする。お腹の上に子供を乗せて、眠りつくまで、何回も、何回も繰り返す。隣に寝ている上の子も一緒にうたい、小さい妹を寝かせようとする。

子守り歌は、子供を寝かせながら、母親自身の気持ちも落ち着く歌である。いつか子守り歌なんてうたわない日がくるだろう。いつかこの子が、自分の子に子守り歌をうたってやる日が来るかもしれない。

枇杷の木に雨が降りかかる音がする。夜の間に枇杷の実はふさふさと灯って、家々を見守っている。



絵・ミズバシヨウ／小柳吉次

## 紫陽花

梅雨が続いて、家にずっといた子供の頃、折り紙で次から次へいろんな花を折った。咲き始めた紫陽花の、白っぽいのを見ると、そんな折り紙の花のように思える。四枚の萼片がくべんがどれもきっちり開いて、全体に見ても、一つ一つの花を見ても美しい。

紫陽花が栽培され始めた頃は、頭のように大きな花なので幽霊花と呼ばれ、人々に嫌わ

れていた花という。

戸口戸口あぢさゐ満てりふさふさと貧の  
序列を陽に消さむため 浜田 到（架橋）

町中の紫陽花が競うように、玄関口に咲いている。濃い色の西洋紫陽花や、額紫陽花、少し小さめの紫陽花。

このごろの日暮れおもえば遠天を あじ  
さいいろのふねながれゆく 同

子供の頃は紫陽花は七色に変わる虹にじのような楽しい花だと思っていた。大人になると花の見方も変わってくる。悲しい夢を見ているようなこの歌。「あじさいいろ」という言葉は消え入りそうで、儚はかない感じがする。


うつつなき母の笑まひに似てゆるる紺青  
ふかきあぢさゐの花 岡野弘彦

三好達治（三好）の「乳母車」という詩に「母よ／淡くかなしきものふるなり／紫陽花いろのものふるなり」というフレーズがあった。子供の頃に見た、ぼんやりとした母の微笑ほほえみ。どこか不安げに胸に残って、紫陽花を見るたび、蘇よみがえるのだろう。

昼間見し紫陽花の群夢に来てぐらりぐらりと頭をゆらしたり

岩切久美子「そらみみ」

紫陽花園のようなものが最近によくある。神戸の六甲山植物園に一度見に行ったことがある。たくさんの紫陽花の色の濃淡に包まれ、身体がふわりと浮いてしまうような気がした。夢の中で、昼間見た紫陽花が揺れている。自分の頭が揺れるように。



あじさい花  
紫陽花



## どくだみ

六月のぬるい風が吹いて、薄暗いところにどくだみが白く咲いているのを見ると、好きな花なのに、こころなしか憂鬱な気分になる。どくだみ独特のきつい葉の匂い、暗い葉の色。根が強く、庭に植えると、増えて始末に負えないと言う。

梅雨ふかくひらきて白き十葉が欲望のこと闇に揺れおり

阿木津 英「天の鴉片」

馬に対し十種の薬効があるというどくだみ。そこから十葉と言う別名がある。小さい花だが、どこか強い存在感がある。日本では路傍の草だが、欧州には自生しない花でその美しさから名高い花になっているという。

毒だみが土を占めゆく勢力をわれは憎めり暑に衰へて

真鍋美恵子『白緑』

近年、猛暑の夏が多い。人間がまいっていても、夏の草花は生命力旺盛で、こちらの生

## どくだみ

気も吸い取られてしまいうさだ。どくだみの葉や茎は錆びた色をしている。血液でも通っているような色である。

どくだみはここに花さき人間のかかわるところ月つよく差す

坪野哲久

夜の月の光の中に咲いているどくだみ。白さが昼間よりいっそう映えている。足元に咲いているのに気づかないで、子供が転んだとき、夜の中でどくだみの葉の匂いが猛烈に匂った。





ほたるぶくろ  
蛍袋

■  
蛍袋

蛍袋のような釣り鐘型の花を咲かせるものは、どれも可憐な感じがする。淡いピンクや薄紫、白色もある。山道の木の薄暗い根本などに咲いて、雨がよく似合う花である。

絵本の挿し絵に、子供のねずみが蛍袋の花

を頭から被り、友達を驚かすという絵があった。釣り鐘草、提灯花、風鈴草とさまざまな異名を持つ花である。

へビトンボ解るといへば朝かけに見にくくほたる袋も踏みて

馬場あき子『飛種』

へビトンボは山によくいる、ちよつと気持ちの悪い格好をした虫である。それが今から解るといふ。川が近い草むらであろうか。蛍袋も踏んで慌てて見に行っているのだから。ほたる滅びてほたる袋はほの白しひと日さやさやと雨に濡れたり

同

子供が蛍をこの花に入れたから、蛍袋の名がついたという説がある。またそうでなく「火垂る袋」で提灯を表わしているという説もある。

蛍袋が咲く頃、蛍は飛び始めている。蛍は年々、少なくなってきた。手のひらにのせて眺めるだけで草むらへそつと戻して帰る。

貝母ありしあたりの茂り紫の白の蛍袋  
花さかんなり

石川不二子 さくら食ふ

貝母とは春百合ともいわれる、淡黄色のうつむいた小さな花。それが咲いていた辺りに、今度は蛍袋の花が咲いている。蛍袋の花が終わる頃、本当の夏がやってくる。

まえだ・やすこ 「塔」 会員